

上間 陽子 著

『裸足で逃げる—沖繩の夜の街の少女たち』

(太田出版、2017年2月 264頁)

岩田 正美



本書は、出版するや否や、各方面で注目され、版を重ねている。その著作を、あえて現代女性キャリア研究所機関誌で紹介したいと思ったのは、現代女性とキャリアということ、最も底辺から考えていくべきだという私の年来の考えを、本書ほど明確に基礎づけてくれるものはないからだ。確かに日本では、高学歴女性のキャリア形成すら課題の多い現状がある。日本女子大学に設置された現代女性キャリア研究所の課題は、たとえば大卒女性のキャリア形成を阻害する要因や積極的なリカレント教育などにあることは言うまでもない。こうした文脈では、企業、家族、社会における女性一般の、男性に対する不平等の構造が問題にされる。むろんそれは正しいが、同時に、女性の内部にも社会階層による格差があり、高等教育の機会や、多様な職業人生の選択肢の拓かれ方に、大きな違いがあることを見落としてはならない。

本書は、「家族や恋人や知らない男たちから暴力を受けながら育ち、そこからひとりで逃げて、自分の居場所を作り上げて」（19頁）といった沖繩の6人の少女たちの物語である。「普通」は、子どもは愛されて育ち、大切にされていた記憶をその身体に留めている、と上間は言う。しかし、身体を押さえつけられ、なぐられ、あるいはネグレクトされた子どもたちは、まだ十分成長しないうちに、そこから「裸足で逃げる」しかない。震えながら。その背後には、困窮して「普通の」生活を営むのが困難になった家族内部に、些細なことで暴力が発動され、それが循環していく構造があると上間は指摘する。その暴力はより弱いものの身体に向けられ、またそれは世代を超えて循環する。強い者は弱い者に暴力を振るい、子どもたちは逃げられる年齢になれば、そこから逃げていくか、あるいはじっと留まっている。

少女たちは、この暴力の循環のなかで育ち、いくつかの異なった「家」を転々とし、まだ十代のうちに子どもを産んで、結局は風俗産業（キャバクラなど）に就職することになる。「キャバ嬢の仕事が、日本の女子中高生のなりたい職業にランクインするようになって久しい。若い女性が層として貧困に陥るなか、華やかなドレスを身にまとい、男性客とのトークでお金を得るキャバ嬢が、若い女性たちの憧れの職業となるのもよくわかる。しかし、沖繩のキャバクラ店では、とにかく子どもと生活するためにこの仕事をはじめたという若いシングルマザーたちが働いている」（58頁）。キャバクラへの就職に先だつ妊娠出産は、決して安定していない。強姦、DVを繰り返す恋人、実家の親や兄弟からも支援されず、ひとりで出産した少女もいる。その子どもを育てていくために、キャバ嬢となる。父親がはっきりしている場合も、「慰謝料も養育費も一銭ももらえず」、子どもを引き取った彼女たちにとって、スーパーやコンビニのレジ打ちより、時給の高いキャバクラの仕事を選択するのは必然だった（58頁）。むろん、中卒という学歴の問題もある。また児

童養育費や生活保護の手続きも嫌がってしない場合があるのは、福祉関係や役所の職員が見せる蔑視に耐えられないからかもしれない。キャバクラは、子どもとの生活を成り立たせる唯一の現実的な選択肢なのである。

しかし6人の少女たちは、それぞれにキャバクラを抜けて、「夢」を実現しようともがく。「普通」のキャリア研究的に言えば、特に、看護師となった少女の選択に目を見張られる。恋人からの暴力を受けながらの出産は危険も伴い、超低体重児で生まれた子どもには重い脳性麻痺があった。その子どものケアを行いつつ、少女は定時制高校に復帰する。やがて看護婦になる決心をし、看護専門学校を目指す。それは、出産時や子どものケアに関わって、親身に世話をしてくれた看護師や保健師の存在が大きい。また障害児の母として、「障がいをもって生きるひとのこと、脳性麻痺をもち生活すること、病院で生活するひとたちのこと」を知ったからでもあろう。専門学校の実習、看護師としての経験がこれに加わり、今では新人教育を任されるようになったという話は、ほっとさせられるものがある。他の人々は、自分の子ども時代には与えられなかった幸せな結婚や子育てを望み、キャバクラの仕事辞めた人もいれば、過去を消すように、消息を絶った人もいる。むしろ、「幸福な家族」が継続したかどうかはわからないし、彼女たちの拠り所である子どもたちの生の軌跡がどうなるかもわからないのではあるが。

こうした少女たちの背景に沖縄の現実があると上間は指摘する。基地のフェンスとよりそうように立地した繁華街、先輩—後輩で繋がれた男性ネットワークの強固な存在が許す暴力性など。だが、日本中、あるいは世界中に、暴力の中で育ち、キャリアを形成するための教育も満足に受けずに、母となって、母子の生活のためにそのキャリアを風俗産業からスタートさせざるをえない少女たちは沢山いるだろう。重篤な児童虐待などの背景とも共通するものである。DVや妊娠への社会的援助はあっても形式的なもので、相談に行っても木で鼻を括るように、追い返される。だから彼女たちは、そのような社会制度から遠ざかる。その結果、彼女たちの選択肢はますます狭まっていくのである。評者の専門から言えば、生活保護の窓口や民生委員などが信頼されていない現実には、あらためてため息が出るが、なぜそうかといえ、この少女たちの生活史を知らないし、知ろうとしないからである。

同様に、女性の地位改善とか、男女平等の実現も、この6人の少女たちのような生活史をスキップしたところには実現しないだろう。そうした意味で、ぜひ本書の一読をお勧めする。文体もよく考え抜かれ、インタビュー調査による生活史研究としても秀逸である。

(いわた まさみ：日本女子大学名誉教授)